

課題の概要

- 提案構想名 「自立若手教員による異分野融合領域の創出」
- 総括責任者名 「千葉喬三」
- 提案機関名 「岡山大学」

機関の現状

- ・岡山大学は大規模総合大学として、中国地方の大学及び大学院教育研究の中核を担っており、積極的に異分野融合に取り組んでいる。論文発表数は11位、論文被引用数は13位、最近4年間にNature誌に発表された論文は6件（自然科学研究科）である。大型資金は21世紀COE2件、振興調整費1件、また科研費採択件数は13位（平成19年度）、その他の外部資金受入件数は13位である（平成18年度）。
- ・岡山大学では、若手研究者スタートアップ研究支援事業、若手トップリサーチャー研究奨励事業、次世代研究者・異分野研究連携コア育成支援事業、の3事業により若手教員の重点的な育成を行っている。
- ・岡山大学では全国に先駆けて全教員について評価を行い、平成19年度からその結果を給与に反映させている。その評価基準は明確でかつ被評価者へ公開されたものである。

人材養成システム改革・若手研究者育成の構想

- ・既存の大型プロジェクト研究よりさらに未来を志向した、異分野融合先端研究領域を若手研究者に創出させる。そのため彼らに大幅な研究自由度を与え、個人あるいは自立的なグループの単位で研究を行わせる。その受け入れ組織として、教育研究プログラム戦略支援センターの中に異分野融合先端研究コアを創設する。
- ・テニュア・トラック教員を国際公募し、国内外の外部委員を含む評価委員会で審査の上、特任助教あるいは特任准教授として採用（11名）し、上記コアに在籍させる。各テニュア・トラック教員に分野の異なる複数の助言教員（メンター）を付け、異分野融合研究を推進させる。
- ・テニュア・トラック教員が自立するのに必要な研究資金、研究スペース、博士研究員等を措置する。教育経験として、博士後期課程学生の副指導と「異分野融合科学」の講義を持たせる。
- ・本テニュア・トラック教員制度について、5年後に制度評価を行い、自然科学研究科および環境学研究科の新規採用若手教員にこの制度を導入する。その後、この制度の全学的な波及に努める。

ミッションステートメントの概要

- ・中間時（3年目）の達成目標
11名のテニュア・トラック教員について、評価委員会で研究進捗評価を行う。とくに優れた教員については、ただちにテニュア教員として採用する。この時点で半数以上の教員が外部資金を獲得し、資金的にも自立していることを目標とする。
- ・終了時（5年目）の達成目標
テニュア教員への評価基準として、革新領域創出へ向けた論文発表や特許出願などの成果が、採用時の提案に沿って出ていることを要求する。11名全員が高い評価を得て、テニュア教員に移行することを目標とする。ただし後一步でテニュア教員への基準に達しない者については、1年間の猶予期間を与え、再評価を行う。
なお、最終年次に、異分野融合先端研究コア主催で国際シンポジウムを行う。



自立若手教員による異分野融合領域の創出(実施体制)

学長

教育研究プログラム戦略支援センター

その他の拠点形成プログラム

その他の拠点形成プログラム

...

異分野融合先端研究コア

コア運営委員長

運営協議会

テニユア・トラック教員(11名)

複数の領域に所属
自由にグループを構成

評価委員会

メンター教員

自然科学研究科

環境学研究科

若手教員(学内公募)

博士後期
課程学生

教育組織



自立若手教員による異分野融合領域の創出(実施内容)

◆手厚いセーフティネット

◆主メンター教員などによる次のポスト獲得への支援

- 自立した研究者
- 研究資金、研究スペース、博士研究員等の措置
 - 積極的な外部資金応募
学内外での自由な研究グループ形成
 - 教育経験獲得への配慮

複数のメンター教員

◆主メンター教員による責任をもった支援

◆異分野融合領域創成への強い誘導

テニユア教員
(准教授又は教授)

◆全テニユア・トラック教員のためのポスト準備

1年延長して再評価

不採用

教員採用人事協議会

運営協議会

◆自己申告した計画に基づく新領域創成の評価

5年度
最終評価

評価
評価委員会

岡山大学教員活動
評価 (毎年)

3年度
中間評価

評価
助言
評価委員会

テニユア・トラック教員
(特任助教又は特任准教授)

本プログラム終了後、自然科学研究科と環境学研究科でテニユア・トラック教員制度の導入へ

採用審査

教員採用人事協議会

評価委員会

◆国内外の外部委員も交えた透明性の高い採用審査

国際公募

運営協議会

◆異分野融合領域創成の革新性および実現性を評価

ミッションステートメント

- 提案構想名 「自立若手教員による異分野融合領域の創出」
- 総括責任者名 「千葉喬三」
- 提案機関名 「岡山大学」

(1) 人材養成システム改革構想の概要

岡山大学は、将来の革新基幹技術となりうる**異分野融合新領域創出**を研究の重点と位置づけ、その担い手である若手研究者の育成のための制度改革を行う。若手研究者が自立して異分野融合研究領域の創出を行う研究組織として「**異分野融合先端研究コア**」を設置する。同研究コアには今回国際公募する11名のテニユア・トラック教員が在籍し、それぞれ複数の研究領域に属する。

テニユア・トラック教員は**メンター教員の助言と支援**を受けながら、学内公募により選抜され同研究コアのメンバーになった若手教員とともに異分野融合研究を遂行する。テニユア・トラック教員は研究に専念するが、博士後期課程学生の副指導教員や、博士後期課程対象の「異分野融合科学 (Interdisciplinary Sciences)」の講義 (一人当たり年2回程度担当) などで教育経験も積む。

なお、テニユア・トラック教員の採用審査や研究進捗の評価は、国内外の外部委員を含む評価委員会で行う。当該評価の基準は被評価者にあらかじめ公開されており、テニユア・トラック教員がどの方向に研究を推進すればよいか明確になっている。

(2) 3年目における具体的な目標

11名のテニユア・トラック教員について研究進捗評価を行い、極めて優秀と判断される教員については、ただちにテニユア教員として採用する。3年目の時点で半数以上のテニユア・トラック教員が外部資金を獲得し、資金的にも自立していることを目標とする。学内公募により選抜され異分野融合先端研究コアのメンバーになった若手教員についても評価を行い、必要な場合は入れ替えを行う。

(3) 実施期間終了時における具体的な目標

テニユア・トラック教員については、全員が外部資金を獲得し、高インパクトファクター誌への論文発表や特許出願などの形で、採用時に提案した研究課題を踏まえた革新領域創出への成果を出していることを要求する。11名全員が評価委員会で**テニユア教員への基準を満たす評価**を得て、テニユア教員に移行することを期待する。ただし、後一步で基準に達すると評価された者には、**1年間の猶予期間**を与え、再評価を行う。

テニユア・トラック教員とともに異分野融合研究を遂行する若手教員 (学内公募により選抜) については、年間10名程度の若手教員が異分野融合先端研究コアに参画し、5年間で同研究コアにおいてのべ20名程度の若手教員が研究を進めることを目標とする。当該若手教員の多くが若手トップリサーチャー研究奨励事業や次世代研究者・異分野研究連携コア育成支援事業など学内制度から研究支援を受けられるような研究実績をあげることを期待する。

(4) 実施期間終了後の取組

本テニユア・トラック教員制度について、5年後に制度評価を行う。この評価を踏まえ、必要な修正を加えた上で、**自然科学研究科と環境学研究科で新しく採用する若**

手教員にこの制度を適用する。その後、この制度の全学的な波及に努める。

異分野融合先端研究コアについても、5年後に評価を行い、必要な修正を行った上で引き続き**革新研究領域創出拠点として発展**させる。上記の2研究科において若手教員をテニユア・トラック教員制度により採用するようになった後も、同研究コアのメンバーとなる若手教員を学内公募により選抜し、同研究コアにおいて革新領域創出に向けた研究を遂行する。

(5) 期待される波及効果

本人材養成システム改革は、若手教員を研究の面において、小講座や学科、専攻といった教育組織から自立した研究組織である「異分野融合先端研究コア」に所属させ、彼らの斬新な発想と気力、体力を活用して、**未来志向の革新研究領域創出**へ挑戦させようとするものである。同研究コアに所属する若手教員は異なる分野の複数の研究領域に属し、その領域のメンター教員からの助言と支援を受けながら、**自然に異分野融合型の挑戦的研究を行う組織を形成**することができる。また、テニユア・トラック教員制度の導入と同研究コアに所属する若手教員の評価（テニユア・トラック教員の採用審査や研究進捗の評価、同研究コアのメンバーである若手教員の研究進捗の評価）の実施によって、若手教員が自立して革新研究領域に挑戦しようとする意欲を高めることができる。

岡山大学におけるこのような人材養成システム改革は、**地方大規模総合大学院大学における人材養成システム改革のモデル**となるものである。同時に、「学都 岡山大学」として、中四国地域の教育研究のレベルアップに大きく貢献することが期待される。